

ASIA Indicators

定例経済指標レポート

台湾、国内外ともに不透明さがくすぶる (Asia Weekly (8/22~8/26))

~香港では本土の不透明感が重石に~

発表日: 2016年8月26日(金)

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹 (03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
8/22(月)	(台湾)7月失業率(季調済)	3.96%	3.97%	3.96%
	7月輸出受注(前年比)	▲3.4%	▲0.9%	▲2.4%
	(香港)7月消費者物価(前年比)	+2.3%	+2.3%	+2.4%
8/23(火)	(シンガポール)7月消費者物価(前年比)	▲0.7%	▲0.5%	▲0.7%
	(台湾)7月鉱工業生産(前年比)	▲0.31%	+1.70%	+1.14%
8/24(水)	(ニュージーランド)7月輸出(億 NZドル)	39.6	40.7	42.5
	7月輸入(億 NZドル)	44.0	44.5	41.4
8/25(木)	(香港)7月輸出(前年比)	▲5.1%	▲2.1%	▲1.0%
	7月輸入(前年比)	▲3.3%	▲1.5%	▲0.9%
8/26(金)	(シンガポール)7月鉱工業生産(前年比)	▲3.6%	+0.8%	+0.6%
	(タイ)7月輸出(前年比)	▲4.40%	▲2.20%	▲0.07%
	7月輸入(前年比)	▲7.20%	▲5.74%	▲10.11%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

【台湾】 ~雇用の頭打ち感の内需の足かせとなるなか、外需の不透明感も生産の足踏みに繋がっている~

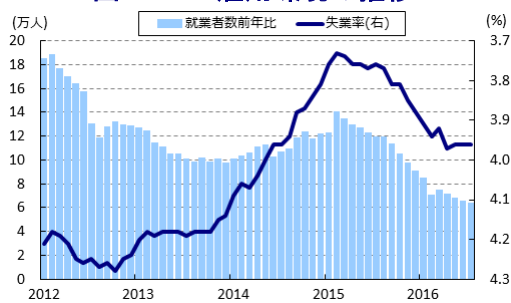
22日に発表された7月の失業率(季調済)は3.96%となり、前月(3.96%)から3ヶ月連続で横這いでの推移となった。ただし、失業者数は前月比+0.1万人と前月(同▲0.1万人)から2ヶ月ぶりに拡大に転じており、新卒者で底堅い動きがみられる一方、既卒者を中心に失業者が増加する動きがみられるほか、自発的失業も増加基調を強めるなど雇用環境の厳しさがうかがえる。一方、雇用者数は前月比+0.4万人と拡大基調が続いている上、前月(同+0.2万人)からそのペースも加速しており、分野別ではサービス関連で底堅い動きがみられるものの、製造業や建設業などを中心に頭打ち感や下押し圧力が強まる動きがみられるなど、輸出産業を中心に厳しい展開となっている。なお、労働力人口は前月比+0.4万人と拡大しており、前月(同+0.3万人)から拡大ペースが加速する動きはみられるものの、中長期的には頭打ち感が強まる動きがみられるなど、外需を中心に不透明感がくすぶるなかで雇用環境は厳しさを増していると判断出来る。

また、同日に発表された7月の輸出受注は前年同月比▲3.4%と16ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月(同▲2.4%)からマイナス幅が拡大している。当研究所が試算した季節調整値ベースの前月比では3ヶ月ぶりに減少に転じており、世界経済を取り巻く環境は不透明な展開が続くなか、外需を巡る動きも一進一退を続けている。財別では、主力の電気機器関連に底堅さがみられる一方、IT関連や精密機械関連を中心に下押し圧力が掛かっているほか、化学関連など中間財などの受注も鈍化するなど全体の足を引っ張っている。国・地域別では、長期に亘って低迷が続いている日本向けに底入れ感が出ているものの、最大の輸出先である中国本土向けのほか、米国や欧州といった先進国向けも勢いに乏しい展開が続いている。

23日に発表された7月の鉱工業生産は前年同月比▲0.31%となり、前月(同+1.14%)から3ヶ月ぶりに前年を下回る伸びに転じている。前月比は+0.44%と前月(同▲0.07%)から2ヶ月ぶりに拡大に転じている。

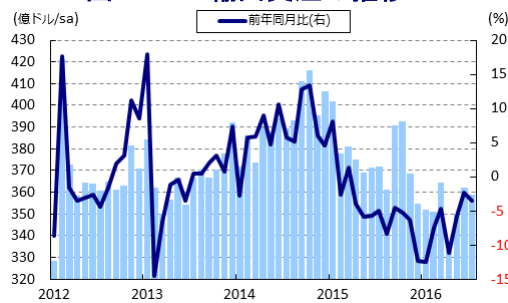
ものの、拡大と減少を交互に繰り返す一進一退の展開が続いている。輸出の先行きについては不透明な展開が続いているものの、製造業の生産には底堅さがみられる一方、内需の弱さを反映する形で電力やガスといった公益関連の生産に軒並み下押し圧力が掛かっているほか、建設需要の低迷に伴い関連の生産は大幅マイナスとなるなど、内需関連の低迷が足を引っ張っている。先行きについては、輸出の不透明さも重石となる可能性が懸念されるなど、生産の足踏み状態がしばらく続くことも考えられよう。

図1 TW 雇用環境の推移



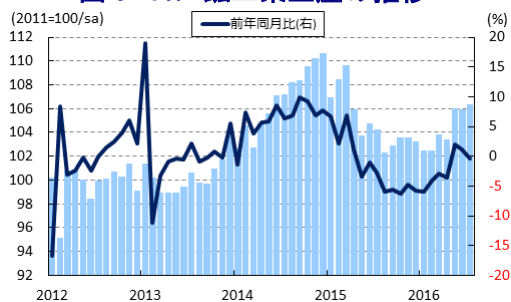
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図2 TW 輸出受注の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図3 TW 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

【香港】～景気の不透明さでディスインフレ基調が続くなか、外需を取り巻く環境も不透明な状況にある～

22日に発表された7月の消費者物価は前年同月比+2.3%となり、前月(同+2.4%)から伸びが鈍化した。ただし、前月比は+0.39%と前月(同+0.00%)から上昇ペースが加速しており、穀物のほか、野菜や果物などの生鮮品を中心に食料品価格が上昇に転じている一方、エネルギー価格を巡っては都市ガス料金が上昇しているものの、プロパンガス価格は下落に転じたほか、原油相場の低迷長期化を受けてガソリン価格も下落しており、生活必需品を巡る物価動向はまちまちの状況が続いている。ただし、2007年以降断続的に実施されている公営住宅を対象とした賃料減免措置をはじめとする物価支援策の影響を除いたベースでも、前年同月比+2.0%と前月(同+2.1%)から伸びが鈍化している。娯楽関連や観光関連など一部のサービス物価に上昇圧力が高まる動きがみられる一方、消費財価格は下落基調を強めており、中国本土景気の減速などに伴う先行き不透明感が物価の重石になっている様子がうかがえる。

25日に発表された7月の輸出額は前年同月比▲5.1%と15ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月(同▲1.0%)からマイナス幅も拡大している。当研究所が試算して季節調整値に基づく前月比も2ヶ月ぶりに減少に転じている上、減少幅は先月の増加幅を上回るペースで減少するなど、力強さを欠く展開が続いている。米国景気の堅調さを背景に米国向けは底堅い動きをみせているほか、日本向けなども底入れしている一方、中国本土景気に不動産投資の頭打ち感などを理由に一服感が出ていることに加え、英国のEU離脱を巡る不透明感を理由にEU向けが鈍化していることも足かせになっている。一方の輸入額は前年同月比▲3.3%と18ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月(同▲0.9%)からマイナス幅も拡大している。前月比も2ヶ月ぶりに減少に転じており、年明け以降上昇基調を強めてきた原油相場が調整に転じたことに加え、中国本土の景気に一服感が出ていることも輸入の下押し圧力となっている。結果、貿易収支は▲333.07億HKドルと前月(▲

455.95 億HKドル) から赤字幅が縮小している。

図4 HK インフレ率の推移

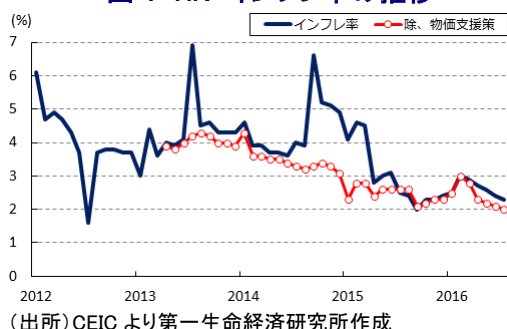
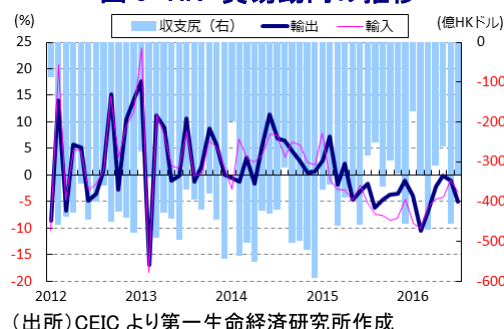


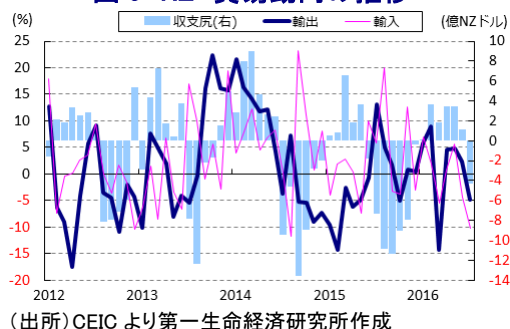
図5 HK 貿易動向の推移



【ニュージーランド】 ～肉類や果物関連の輸出に下押し圧力が掛かるなか、内需の堅調で輸入は底堅い～

24日に発表された7月の輸出額は前年同月比▲4.9%となり、前月(同+2.4%)から4ヶ月ぶりに前年を下回る伸びに転じた。しかしながら、前月比は+2.2%と前月(同▲0.9%)から3ヶ月ぶりに拡大に転じており、拡大と縮小を繰り返す一進一退の展開が続いている。財別では牛肉や羊肉などの肉類や果物など食品関連に下押し圧力が掛かったほか、原油相場の調整などに伴い原油関連の輸出額も鈍化している一方、主力の乳製品のほか、機械製品などの輸出額の拡大が全体の押し上げに繋がっている。国・地域別では、米国やEU、日本など先進国向けが軒並み鈍化したほか、最大の輸出先である中国向けにも下押し圧力が掛かる一方、隣国豪州向けのほか、ASEANなどアジア新興国向けの堅調が下支えしている。一方の輸入額は前年同月比▲10.3%と2ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月(同▲4.5%)からマイナス幅も拡大している。ただし、前月比は+5.6%と前月(同▲1.0%)から3ヶ月ぶりに拡大に転じており、内需の底堅さが輸入を押し上げている。原油相場の調整に伴い石油関連の輸入額には下押し圧力が掛かったものの、服飾をはじめとする日用品関連の輸入額の拡大が全体を押し上げている。結果、貿易収支は▲4.33億NZドルと前月(+1.10億NZドル)から7ヶ月ぶりに赤字に転じている。

図6 NZ 貿易動向の推移



【シンガポール】 ～景気の先行き不透明感が根強く残るなか、デフインフレ圧力も長引きそうな様相～

23日に発表された7月の消費者物価は前年同月比▲0.65%と21ヶ月連続でマイナスとなったものの、前月(同▲0.73%)からマイナス幅は縮小している。ただし、前月比は▲0.28%と前月(同+0.74%)から2ヶ月ぶりに下落に転じており、年明け以降の原油相場の底入れを反映する形で電力料金が大幅に引き上げられる動きはみられる一方、LPガスをはじめとするその他のエネルギー価格は下落基調が続いているほか、生鮮品を中心とする食料品価格も落ち着いており、生活必需品を巡る物価動向は比較的安定している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+0.98%と前月(同+1.09%)から伸びが鈍化しているものの、前月比は+0.28%と前月(同+0.03%)から上昇ペースは加速している。教育や医療関連など一部のサービス物価に上昇圧力が強まる動きがみられる一方、景気の先行き不透明感を反映して消費財全般で物価は下落基調が続いており、全般的にみれば物価上昇圧力が高まりやすい状況にはないと判断出来る。

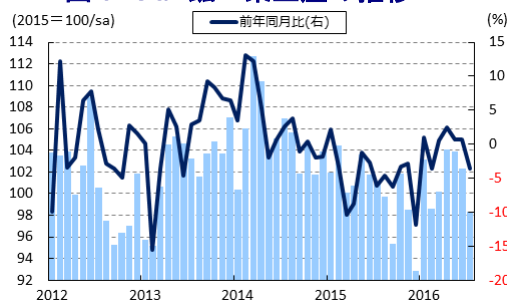
26日に発表された7月の鉱工業生産は前年同月比▲3.6%となり、前月（同+0.6%）から5ヶ月ぶりに前年を下回る伸びに転じた。前月比も▲3.96%と3ヶ月連続で減少している上、前月（同▲1.49%）から一段と減少ペースが加速するなど調整模様が強まっている。月ごとの変動幅が大きい上に生産全体に影響を与えるバイオ・医薬品関連の生産が前月比▲6.50%と前月（同▲19.15%）から2ヶ月連続で減少している上、バイオ・医薬品を除いたベースでも同▲4.85%と前月（同+3.09%）から2ヶ月ぶりに減少に転じるなど、一進一退の展開が続いている。主力の輸出財である電気機器や電子部品などの機械製品関連で調整圧力が強まっているほか、化学関連にも下押し圧力が掛かりやすいなど、外需の不透明感が重石となる形で幅広い分野で伸び悩み動きが確認されている。

図7 SG インフレ率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図8 SG 鉱工業生産の推移

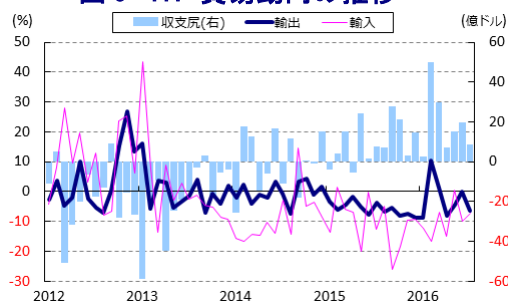


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[タイ] ～農産品や工業製品など幅広い財で輸出に下押し圧力が掛かり、輸入にも下押し圧力となる～

26日に発表された7月の輸出額は前年同月比▲4.40%と4ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月（同▲0.07%）からマイナス幅も拡大している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も3ヶ月ぶりに減少に転じており、主要輸出財である天然ゴムやコメ、砂糖などの農産品の輸出額に下押し圧力が掛かったほか、自動車や化学製品関連の鈍化も足かせになっている。一方の輸入額は前年同月比▲7.20%と2ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月（同▲10.11%）からマイナス幅は縮小している。前月比も3ヶ月ぶりに減少に転じており、原油をはじめとする国際商品市況の調整に加え、輸出が鈍化したことで原材料需要に下押し圧力が掛かったことも輸入額の下押し圧力になっている。結果、貿易収支は+8.43億ドルと前月（+19.65億ドル）から黒字幅が縮小している。

図9 TH 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上